

---

# IS(インフィニットストラトス)転生した後は・・・

カミュカミュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニットストラトス

IS 転生した後は・・・

### 【Nコード】

N7212Z

### 【作者名】

カミュカミュ

### 【あらすじ】

神によりISの世界に転生された主人公

棗 壘賀（なつめ りょうが）

そんな主人公と一夏達がおりなすストーリー

## こんなんでいいの？ (前編) (前書き)

自分本当に初めて書くんで、下手かも知れませんが是非読んでください！

## こんなんでいいの？（前編）

「あれ？」

目が覚めると俺は知らない場所にいた

「なんでこんなところに居るんだ？」

目の前には白い世界が広がっていた

そして、何があったのか思い返してみる。

今日は午後まで家にいて、本屋にいつて欲しかった新刊と集めてる途中の本も買って帰ったはず。

「あっ」

そういえば帰る途中に引かれそうになった猫助けたっけ。

「じゃあ、俺死んだんだ」

「そうだよ」

?? なんか後ろから声が聞こえたぞ??

後ろを向くと変な格好したじいさんがいた。

「誰？」

すると、じいさんはこう言った

「わし？ 神だよ」

なに言ってんだこのじいさんは？  
頭おかしいんじゃないのか？

「そうですか」

「もち」

嘘つけ

「嘘ではない」

「!!」

心が読めるのかこのじいさんは？

「読めるに決まってるだろ、神だから」

「まあいいや」

「ところで、その神様が俺になんのよう？」

「いやゝお主のあの勇敢な姿に感動してのゝお主にもう一度命をあたえてやろうと思ってるのゝ」

「マジすか!？」

「もちろんじゃ」

「ただし、お主が居た世界は無理じゃからな」

「わかりました。じゃあ少し考えさせてください」

「わかったよ」

それから約二時間・・・

「長い！」

「えっ？」

いきなり神が大声で言ってきた

「お主考えるのがすぎ!! もう、この本の中からワシが決めるから!!」

「別にいいですけど、、」

そんなに長いこと考えてたか？

そんな事を考えながら神が出した本は、

バカテス　これゾン　ISの三冊だった

こんなんでいいの？（前編）（後書き）

すいません1話が全部はいりきらなくて前編と後編に分ける事にな  
ってしまいました。

それはともかく、感動などをお待ちしていますので是非お願いしま  
す。

こんなんでいいの？ (後編) (前書き)

いや〜なんか後編にしてやっちゃった感  
がありますが、あんまり気にしないでください。



## こんなんでいいの？（後編）

バカテス  
奴だった

これゾン

ISの三冊は俺が本屋で買った

「じゃあこの中から決めるからな！」

「わかりましたよ、ゝゝ」

はぁと俺は小さくため息をする

「よし、じゃあいくぞ」

と言ってなぜかサイコロを投げ出した

そしてサイコロが指した目は『IS』と書かれていた

「よし決まったー」

神は嬉しいそうに言った

「それでお主、何か欲しいものはないか？」

「なんでもくれるんですか？」

「もち」

「そうだなISの世界ならとりあえずISに乗れるようにして欲しいのと俺専用のISが欲しい」

「他には無いか？」

「後は・・・とりあえずISが作れるくらいの人材にして身体能力はんーとまあチートにしといて」

「わかったぞ」

「そんなもんでいいや」

「よし！お主が言ったことは全部やっというたからこの先に進むがよい」

「サンキュー」

俺は神様にお礼を言って先に進んだ

そしてもう一度お礼を言おうとして神のほうを見たらニヤニヤ笑っていた

悪い予感がした直後下がなくなり俺は落ちた

「このクソじじいいいいー」

「敬意をしめさなかったお主のせいじゃよ」

「そんな事を聞きながらおれは落ちていった」

こんなんでいいの？（後編）（後書き）

なんかとても長い話になってしまいました。どうだったですか？  
まあそれは良いとしてメインヒロインはシャルにしようと思っ  
ていますが、他の方がいいと言ったのは是非感想くださいなるべく早めに  
締め切るのでもよろしくお願いします。

いやゝ助かったゝて、こゝどこゝ!..? (前書き)

いやゝにしてもまた、長くなってしまいましたよゝ参った参った

ねゝ皆さん読んでくれます

えっ? 読んで無い、ゝゝゝ

ひどいよよよゝゝゝゝゝ (泣)

作者がどっか行ってしまったので本編をどうぞ

いや、助かったくて、うんどう！..?

あれ〜これってヤバくね?..?

あつても、意外と低いじゃんて言ってもビル6階分ぐらいあるけど。

「さて、どうするかな」

などと陽気に考えていると段々と地面が近づいてる事に気がついた。  
ていうか、下に人がいた

それに気がついた俺は下にいる人に

「おーい、どけー」

と思いつ切り叫んだ

「?」

下にいた人は驚いていたみたいだが一応どいてくれた

俺はと言うと着地の時の反動を無くすために

電柱に掴まりながら降りていった。

まあ、ぶっちゃけどいてもらいう意味なんて無かったが一応な?

「ふ〜危なかった」

「?」

さっきまで下にいた人ともい少年はポカンとしたまま突っ立っている。まあ、当然だろういきなり上から人が降って来たからな

などと考えて事にをしていると

「あの〜」

さっきの少年と言うか、俺と同じ年くらいのイケメンが話しかけで

きた

「大丈夫ですか？」

「えっ？ あっ？ 大丈夫ですよ」

結構高いところから落ちたのに無傷だった  
まあ電柱につかまったのもあるが

「それよりここはどこですか？」

「ここですか？ ここは俺の家ですけど・・・」

「なるど・・・所で、君は誰？ ちなみに俺は

棗 壘賀普通に壘賀って呼んでくれ」

「俺は織斑 一夏俺も一夏でいいぜ」

あれ？ こんな所で一夏と会ってしまったがこれはIS学園に入る前か  
などと考えていると一夏が

「本当に大丈夫なのか？」

と心配そうに聞いてきた

「ああ大丈夫だって」

「でもお前結構高いところから落ちてきたぞ」

「本当に大丈夫だって。俺結構体丈夫だからな」

「まあ壘賀が大丈夫って言うならいいが・・・」

所でなんで上から落ちてきたんだ？」

などと当然の疑問がかえってきた。上から落ちてきたから当然か

「あゝ実はなちよつと遊んでたら落ちちゃったんだよ」

「どこで遊んでたんだよ!？」

などと見事なツッコミを入れた。当然か  
まあその後も無理矢理一夏を納得させ本題に入った

「どこで一夏？」

「なんだ？」

「お前ん家に当分泊めてくんない？」

「いいけど家の人に連絡しなくていいのか？」

「俺、両親いないんだ。もう、他界しちゃった」

「悪い知らないとは言え聞いちゃって」

「別に良いよ気にしてないから」

と言っても向こうの世界で訳あって別々に暮らしていただけだけど

「とりあえずお前の家に当分泊めてくれよ」

「良いぜ」

これで当分寝る所にも困らなくなった  
とりあえず一夏の家の入ろう

「お邪魔しまーす」

「この家いま俺以外誰もいないから遠慮しないでいいぞ」

「お前の親は仕事に行ってるのか？」  
あれ？一夏の顔が少し暗くなったぞ？

「いや、俺は千冬姉と一緒に両親に捨てられたんだ」

あゝそういや原作でそんな事言ってたなマズイこと聞いちゃったな

「悪い一夏、俺も知らずとは言え聞いちゃまって」

「別に良いよ今更りようがなんてどうでもいいし、俺には千冬姉が  
居るからな。それにおあいこだろ？」

そうやって一夏は何も気にしてないように言ってくれた

「ていうか、お前姉ちゃんいたのかよ」

「ああ、今はどこに居るかわからないけどな」

「そーいや一夏」

「なんだ？」

「俺のこと姉ちゃんに泊まって良いか確認しなくても良いのか？」



「そーいやそーだな。一応聞いてみるよ」  
と言い出し携帯で電話し始めた。

ブルルル

『もしもし？千冬姉？』

『なんだ一夏？』

『実は友達が当分泊めてくれて言ってるけど泊めていい？』

『きちんと親子さんに連絡したのか？』

『実は他界してるんだって』

『・・・分かった泊めてやれ』

『サンキュー千冬姉』

『それと一夏』

『なに？』

『お前4月からIS学園に通うんだから、きちんと用意しとけよ』

『わかってるよ。それじゃ千冬姉』

『ああ』

ガチャ

「千冬姉良いつてさ」

「そうか、そりゃあよかった」

「そういや一夏？」

「なんだ？」

「お前IS学園に行くって・・・」

「聞こえてたのか」

「悪い盗み聞きするつもりはなかったんだ」

「わかってるよ。まあIS動かした俺がいけないんだけどな」

「へえーお前IS動かしたんだ」

「それでよ色々大変だったんだぜ」

などと適当にだべって夕飯を一夏につくってもらい（本人いわく、客人はゆっくりしてほしいんだと）お風呂に入り部屋に案内してもらい今日は色んな事があったのでベットに入ったらすぐに眠った。

次の日の朝、朝食を食べる時に

「なあ一夏」

「なんだ？」

「悪いけどこの街案内してくんない？俺この街初めてでどこに何が

あるかわかんないからさ」

「別にいいぜ」

「じゃあ10時から行こうぜ」

「ああ、いいぜ、それよりお前のその銀のネックレスかっこいいな  
どこで買ったんだよ」

「いや、なんか気づいたらついてたんだよ」

「へえ」

などとゆったり話していると

「おっそろそろ時間だいこうぜ」

「ああ」

こうして俺と一夏は街に行った  
それから数時間後

「壘賀大体の買い物終わったか？」

「ああ、今日はサンキューな一夏」

「別に良いつてことよ」

と言いつつも時計は4時を指していた

「にしてもだいぶ買ったな」

「しょうがないだろ、なんにも着替えがないんだから」

そう、転生した俺には無論着替えなどなかったが奇跡的に財布とお金ならあった

「にしても買いすぎだって」

などと話しているといきなり目の前に車が

数台止まり中からいきなり人が出て来て一夏と俺をさらおうとしてきた



いやゝ助かったゝて、ここどこ!?! (後書き)

いやゝにしてもどうなるんでしょうねゝ

壘賀さん一夏さん

「次はどうとう俺のISが登場するぜ」

「いやゝにしてもお前のISかっこよかったな」

「だろ?」

あのゝ俺抜きで話しすすめないでくれます

「なに? まだいたの?」

えっ!?! 壘賀さんちよっひどくない?

「べっつにゝ」

まあいいやゝ、じゃあしめますか

「「感想やコメント待ってるぜ」」

**いや／＼やっど登場かよ？何か遅くね？（前書き）**

いや／＼にしても前の話で二人は拐われそうになったのだが／＼

「何でそんな説明口調なの？」

気にしたら負けだぞ（笑）

「（笑）ってなんだよ！ふざけてんのかよ？」

別にふざけてなんかいませんよ／＼

「何かうぜえーーーーー？」

まあまあ、気にせず本編をどうぞ／＼

「たくっ、分かった？」

「いくぞ一夏？」

「えっ？あっ！わかった？」

「「それではどうぞ」」

いや／＼やっ**と登場**かよ？**何か遅く**ね？

「てめえら！なにすんだよ？」

「貴様ら大人しくしろ！」

「チッ？」

いきなり大勢の大人が俺と一夏を襲ってきた

「一夏？捕まるんじゃないぞ？」

「わかってるよ！」

と、短い会話をして俺と一夏で大人達を倒しにいった

「よっ！はっ！」

手始めに近くにいた男二人を殴り倒した

「小僧？」

おっ怒った怒った怖いねゝ

でも、弱すぎる

「あんたら邪魔」

と言って三人くらい同時に殴った

男達は「ぐはっ？」と言って倒れた

ふと、一夏の方を見ると「ぐっ？」と言って倒れた。男の手を見るとスタンガンが握られていた

「てめえら、よくも一夏を？」



「おっと動くなよ。こいつがどうなっても良いのか？」

「くっ！」

その時、後ろから思いつ切り殴られ、意識が飛びそうになった時、ネックレスから何が流れてきた

「何だ？これは？」

微かに聞こえる、私を呼べと言う声が

そう、その名も『双月』（そうげつ）

その名前を呼んだ瞬間、俺の体は光に包まれた

「何だこれは？」

ふと気がついた時には意識がハッキリしており、俺の体にISが展開されていた

「すっすげえ？これが俺のISか」

などに関心しているといきなり男達が顔を真っ青にして逃げていった

「チッ！あいつら」

と思い追いかけようとしたが、一夏を放っておくこともできないので一夏を起こしてサッサと帰った。

無論ISは誰にも見られない様にした

帰りに「あいつらどうしたんだよ？」と聞かれたので「何か逃げた」  
「と適当に話ながら帰った」

夜、一夏とテレビを見ていると突然『街に謎のIS現る？』というニュースが流れた

しかもよく見ると俺の顔も映ってた

「一夏」

「何だ？」

「何も聞かないでくれ」

「わかった」

「じゃあ俺もう寝るから」

「わかった、おやすみ」

「おやすみ」

次の日の朝、政府の人間に連れていかれ色々させられた。疲れて説明したくない

そして、何故か俺までI S学園に入る事になってしまったのであった  
そして、一夏は内心「よかった」と思っていたのは秘密である

**いやゝやっ**と登場かよ？何か遅くね？（後書き）

いやゝにしてもどうでしたかお二人さん？

「まあ、俺は双月が出たからもう、満足したけどな」

「俺はもっと何かしたかったな」

そうですかゝそういえばお二人さん、次はとうとうIS学園に入るんですよ？

羨ましいなゝ

「そうでもないだろ」

「そうそう」

そんなもんなんですかねゝ

「そうだよ」

じゃあ、しめて下さいねー

「感想やコメント待ってるぜ」

**I S 学園か・・・つらいな(前書き)**

「作者」

・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい、作者！」

何ですか？

「更新するのが遅いんだよ！」

こっちも忙しいんですよ！

「これだから、ダメ作者は」

ダメ作者言うな！

「はいはい。それでは、本編をどうぞー」

## IS学園か・・・つらいな

政府の人間が来てから数ヶ月がたった・・・

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんどが変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんという、不自然さ・・・というより無理してる感じがするのは俺だけなのか？

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・・・・・」

ちよっとうろたえる副担任がかわいそうだが、俺は特に反応する気はない。頼んだそー一夏。て無理か・・・何で？ かつてそれは俺と一夏以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

しかも一夏の席は真ん中&最前列だからだ。えっ？俺は違うのかだって・・・俺の席は窓際の最後列だから余裕なのだ。おっ！一夏のやつ俺と同じ列にいるポニーテールの娘に救いの視線を出してるよ。しかも無視されてるし。可哀想なやつ。

「・・・くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい？」

あーあ、あのバカいきなり名前を呼ばれて声が裏返ってるよ。案の定、クラスの何人かはくすくすと笑ってるし。俺もだけど。

「あつ、あの、あ、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

何で山田先生はあんなにぺこぺこ頭を下げているんだろうか？というかこの人は本当に年上なんだろうか。同年といわれれば受け入れてしまいそうだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ！」

一夏のやつドンマイだな。先生の行動のせいでさらに注目集めてるよ。おっ喋りだったな。

「えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

（おいおい、『これで終わりじゃないよね？』的な空気がながれるぞ！どうにかしろ一夏。このままだと『暗いやつ』のレッテルを貼られるぞ！）と俺は心の中で思っていた。そう思った瞬間一夏は思いつ切り

「以上です」

と言ってクラスの女子が何人かずっこけていた。（もっとまともな事言えよ!）と思ったとき、パアンツ!と豪快な音がした。どうやら一夏が頭を叩かれてたようだ。

「いっー?」

「・・・・・・・・」

何故か一夏がおそろおそろ振り向きこう言った

「げえっ! 関羽?」

俺も声に出してツッコもうとしたが、なんとか我慢した。そしたら先生が

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」  
と言っていた。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

なんという暴力宣言。本当に先生なのかこの人？悪魔かなんかではないだろうか？  
だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「笑ってるし、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！北九州から！」

いや別に南北海道でもいいitaro。

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

なんかきゃいきゃい騒ぐ女子たちを見て先生飽きてるよ。そして最後のやつは命を大切にしろ。

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

「きゃああああっ！お姉様！もっとし買って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」



おいしい女子たちが何か凄いことになってるぞ。そして一夏が混乱してるぞ。なんでだ？

「で？ 挨拶も満足にできんのか、おまえは」

「いや、千冬姉、俺はー」  
「パアンッ！ 本日三度目。痛そうだな。」

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい、織斑先生」

あー、なるほど。あいつ姉ちゃんが何処に居るか分からないって言うってたな。

というか、そのやりとりまずいんじゃないね。

「え・・・？ 織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」

「それじゃあ、男で『IS』が使えるのも、それが関係して・・・」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

（何か一夏に低温の視線が・・・）  
なんて思っていたら、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

（本当に先生なのか？）とまた、思ったのだった。

「あー・・・」

なんというか、これは精神的にくるものがあつた。というか一夏はもうギブ状態だった。

「・・・・・・・・」

一時間目のIS基礎理論授業が終わって今は休み時間。けれど、この教室内の異様な雰囲気はどうかならないものか。

ちなみに、IS学園ではコマ限界までIS関連教育をするため、入学式当日から普通に授業がある。学園の案内？地図を見ろってさ。酷くない？まあ別にいいんだけど。

（（だがしかし、どうにかならないのかこれは・・・））

俺たち以外全員女子。しかもこの学園全体がそうなのだ。

ちなみに俺と一夏は世界的にもニュースになり俺たちを知らない人はこの学園にはいないのだ。

というわけで現在、廊下には他のクラスの女子、二、三年の先輩ら

が詰めかけている。

しかもなかなか俺たちに話しかけると言うことしない。それはクラス的女子も同じで、『あなた話しかけなさいよ』的な空気と『ちょっとまさか抜け駆けする気じゃないでしょうね』的な緊張感が満ちているからだ。

（そして、今の状況なわけだが）

近くの女子を見ても視線をそらすし。しかも『話しかけて！』という雰囲気はそのままだよ。どうせいっちゅうねん。

（（誰かこの状況を助けてくれ・・・））

そう思った瞬間に一人の女子が話しかけてきた。

## IS学園か・・・つらいな（後書き）

さっさと次回予告お願いします。

「わかったよ。今回はセシリアとの決闘だ」

「セシリアは強かったな」

「一夏、お前負けてたよな」

「お前は勝ってたよな」

はいはい、二人ともネタバレはやめましょうね

「わかったよ。それじゃあ、しめるか一夏！」

「ああっ！」

「感想やコメントまってるぜ！」

**決闘って簡単だね（前編）（前書き）**

「特に言う事がないので本編をどうぞー」

## 決闘って簡単だね（前編）

「……ちょっといいか」

「「え？」」

いかなり一人の女子が話かけてきた。  
とゆうか凄いな。こんな空気の中話かけて来るなんて。

「……箒？」

「……」

「何だ一夏。知り合いなのか？」

「ああ、この前話しただろ。俺の幼馴染の篠ノ之箒だ」

「よろしく篠ノ之さん」

「私の事は箒と呼んでくれ。苗字で呼ばれるのは好きじゃないんだ」

「わかった。じゃあ俺のことも壘賀って呼んでくれ」

「わかった壘賀。それより一夏話がある」

「何だよいきなり」

「さっさと来い」

「俺は席に戻ってるよ」

「ああ、すまない」

と言つて一夏と箒は廊下に行った。てゆうか廊下にも女子が居るから教室でも変わんないと思うんだが・・・と考えていたらチャイムが鳴った。ちなみに一夏は  
パアンツ！

「とつとと席に着け、織斑」

「・・・ご指導ありがとうございます、織斑先生」  
また、頭を叩かれていた。

「ーであるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられー」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。  
しかし、全くついていけない奴がいた。  
そう、それは一夏だ。さっきから教科書をペラペラとめくっている

が意味不明といった顔をしている。しかも隣の女子を驚かせてるし

「織斑くん、何わからないところがありますか？」

わざわざ訊いてあげるなんて優しいな。

「あ、えっと・・・」

あいつ全くわかってないんだろうな。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

どうせ一夏は『おお、もしかしたら頼れる先生なんだろうか』とか思っていたらるんだろうな。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

「え・・・。ぜ、全部、ですか・・・？」

一夏の言葉に山田先生は困っている。

「え、えっと・・・織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促しているが当然だれもあげない。とゆうか『お前もだろ？』



とゆう視線はやめろ一夏。俺は神様のおかげで天才になってるからわからないわけないだろう。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」  
「パアンッ！」

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

なるほど。どうりで一夏の家にあの分厚い本が無かったのか。

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと・・・」

「やれと言っている」

「・・・はい。やります」

あの分厚さを一週間では無理だろ。お前出来るけど。まあ、捨てたあいつが悪いからな。

「ISはその起動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

なるほどな。でも一夏そんな顔してると考えてることがばれるぞ。

「・・・貴様、『自分は望んでここに在るわけではない』と思って

いるな？」

バレてるよ。あいつ考えてることが顔に出てるからな

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

「・・・・・・・・・・」

「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、かんばって？ね？ねっ？」

山田先生は熱心に一夏に詰めよっている。

一夏もやる気を出したようだ。

「はい。それじゃあ、また放課後によりしくお願いします」

「ほ、放課後・・・にふたりきりの教師と生徒・・・。あっ！だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると弱いんですから・・・それに私、男の人は初めてで・・・」

何を言ってるんだ？とゆうかさすがに一夏が可哀想だ。何故かって？それはクラス中の視線が一夏にいつているからだ。

「で、でも、織斑先生の弟さんだったら・・・」

「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ！」

すかさず織斑先生が山田先生を我にかえした。  
山田先生は慌てて教壇に戻ってこけた。

「うー、いたたた・・・」

（・・・大丈夫か？この先生・・・）  
俺と一夏がそう思った瞬間だった。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

二時間目の休み時間、一夏はいきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出した。

ちなみに話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・どういう用件だ？」

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけ

でも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「・・・・・・・・・・」

あーあ、困った顔してるよ一夏の奴。こういうタイプ苦手だからな。俺もだけど。

「悪いな。俺、君が誰かしらないし」

おいおい、クラスメイトなんだから名前ぐらい覚えとけよ。俺も知らないけど。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

セシリアっていうのか。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

一夏がそう言った瞬間、女子数名がずっこけた。

「あ、あ、あ・・・」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの？」

すごい剣幕だな。コワイコワイ。

「おう。知らん」

さすが一夏。正直だな。

「・・・・・・・・・・」

「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、今まで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら・・・・」

失礼な奴だ、テレビぐらい一夏の言えにもあるぞ。ほとんど見てないけど。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。・・・あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そういわれればそうだな」

アホだな一夏。まあ、俺も知らなかったけどな。

「そう！エリートなのですわ！」

なんと、もう復活したよ。さすがはエリート。

「で、そのエリート様が一夏に何の用だよ」

「なんですかのあなたは」

おいおい、エリートなんだからクラスメイトの名前ぐらい覚えとけよ。まあ良いけど。

「俺は棗壘賀だ」

「あら、そうでしたわね。それよりあなた」

「お、おれ？」

「そうです。本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしますの？」

「馬鹿にしてるな一夏」

「何ですって？」

「悪い悪い」

「まあいいですわ。大体、あなたISについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞い

ていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されてもこまるんだが」

「一夏に期待しても損するだけだぞ」

「わかったな！」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

これが優しさなのか？初めて知ったぜ。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。なにせわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

へーこいつ教官倒したのかーって、ん？

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

「ちなみに俺も倒したぞ」

「え・・・・・・・・・・？」

まあ一夏の場合相手が壁にぶつかって動かなくなったただけだけど。俺はきちんと倒したけど。てゆうかさつきからセシリアが驚いている。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子だけってオチじゃないのか？」

あーあ、一夏のバカ。いやな音が聞こえたぞ。俺もう黙っとこ。

「つ、つまり、わたくしだけでないと・・・？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなた達も教官を倒したって言うの？」

「うん、たぶん」

「あなたはどうですの」

「・・・・・・・・・・」

「黙ってないで何かを言ったらどうですか！」

「えーと、落ち着けよな。な？」

「こ、これが落ち着いていられー」



キンコンカーンコン。  
タイミングよくチャイムが鳴った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって？」  
これ以上怒らせるのは面倒そうなので、とりあえずうなずいておいた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

何故かこの時間は織斑先生が教壇に立っている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したと言わんばかりに織斑先生が言った。

「クラス代表者とはそのままでの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。当然のごとく面倒くさいのでやる気はない。一夏は意味がわからないと言った感じだ。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

良かったな一夏。頑張れよ。

「わたしは棗くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏と棗龍賀・・・他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

・・・てそんなのやりたくないねえよ！

「「お、俺？」」

「織斑、棗。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「「ちょっと待った！俺はそんなのやらなー」」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「「い、いやでもー」」

まだ反論を続けようとした俺達を、突然甲高いこえが遮った。

「待ってください！納得がいきませんわ！」

おお、セシリアがこんな所で役にたった。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットに

そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

そうだ、もっと言ってやれ。・・・ん？

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのではあって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

おいおい、この小娘は何を言ってるんだ？

「いいですか？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

何だあの小娘。何様のつもりなんだ。お、珍しくあいつも怒ってるな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

そこまで言ったところで一夏がキレた。

「イギリスだって体してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

――あ。

「なっ・・・？」

あーあ。やっちゃったな一夏。俺は知らんぞー

「あつ、あつ、あなたね！わたくしの祖国を侮辱しますの？」

もうこうなったら、なるようにしかならんぞ。

「決闘ですわ！」

セシリア、ずいぶんご立腹だね。

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い  
ーいえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のわた  
くし、セシリア・オルコットの实力を示すまたとない機会ですわね  
！」

頑張れよ一夏。応援してるぞ。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけたらいいのかなーと」

そう言った瞬間、クラスのみんなが爆笑した。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

まあ、当然の反応だよな。男は俺と一夏以外使えないし。

「・・・じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いなんて、日本の男子はジョークセンスがあるね」

「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

一夏の斜め後ろから女子が話しかけている。

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

「・・・・・・・・・・」

確かに。入試の時の動きを見ても慣れてない感じだったからな。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課

後、第三アリーナで行う。織斑と棗とオルコットはそれぞれ準備をしておくように。それでは授業を始める」

「……って、何で俺も入ってるんですか」

「うるさい！ 貴様に拒否権などない」

なんて人だ。まあ、やるからには負けるつもりはないがな。

「うう……」

放課後、一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ……。？」

「大丈夫か一夏？」

「お前はわかるのかよ？」

「当然。もう、大体の事は覚えたぜ」

「凄いな壘賀は」

などと、のんびり会話をしていると山田先生が来た。

「ああ、織斑くん、棗くん。まだ教室にいたんですね。よかったです。」

「「はい？」」

いったい山田先生はどうしたんだ？

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って山田先生は俺と一夏に部屋の番号の書かれた紙とキーをくれた。

「俺達の部屋、決まってないんじゃないかなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらしいです。・・・織斑くん、棗くん、そのあたりのこと政府から聞いてます？」

最後は俺と一夏にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。

「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最

優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「……あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが……」

別にいいじゃないか一夏羨ましいぞ。俺は違うよ。普通に喋る位置にいるし。

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですねっ……!」

「いや、わかってますけど……。それで、部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できてないですし、今日はもう帰っていいですか?」

「あ、荷物ならー」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

なんて大雑把な性格。まあ、そんだけあれば十分だけど。

「じゃあ時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用の食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシヤワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間



が違いますけど……えっと、その、織斑くんと棗くんは今のところつかえません」

「なんでですか？」

あー、一夏風呂好きだからな。

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか？だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

そんな事したら一夏の命はないからな。

「ええっ？女の子に興味がないんですか？そ、それはそれで問題のような……」

この人は話をきいていなかったのか？

「織斑くん、男にしか興味がないのかしら……？」

「それはそれで……いいはね」

「中学時代の交友関係を洗って！すぐにね！明後日までには裏付けとって！」

なんの話してるのだ女子たちは。

「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

いや、道草くうなって言っても校舎から壘まで五十メートルぐらいしかないから普通無理だろ。

「「ふー……」」

織斑先生と山田先生が教室から出て行くの見送って、俺達はため息混じりに立ち上がった。こんなところにいるよりさっさと部屋に行ったほうがマシだ。

「えーと、ここか。1025室だな」

「俺は1027室だから。後でお前の部屋に行くな」

「ああ」

そう言って一夏とわかれた。部屋に入るとすごく広かった。

「ていうか、俺一人かよ。まあ、気楽でいいけど」

などと、独り言を言っていたら廊下の方が騒がしかったが特に気にしなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7212z/>

---

IS(インフィニットストラトス)転生した後は・・・

2012年1月9日04時21分発行